

ほっかいどう



新型コロナウイルス感染症が流行していた2020年7月12日、ウポポイの愛称で知られるウアイヌコロ コタン（民族共生象徴空間）が胆振管内白老町にオープンした。対面でのコミュニケーションや体験を重視するコンテンツを準備していたウポポイにとって逆風の中での船出だった。

本書は、このような状況が落ち着きを見せ始めた22年12月から23年2月にかけて、ウポポイの中核施設であるアヌココロ アイヌ イコロマケンル（国立アイヌ民族博物館）で開催されたテーマ展示をもとに編まれたものである。

展示では、オープン3年目を迎えるなかで、オープン当時とそれに先立つ11年間の準備期間を振り返り、その初志を再確認するとともにウポポイと国立アイヌ民族博物館の将来を来場者も含めて皆で考えることが目指された。

ウポポイ黎明期 スタッフが記録

国立アイヌ民族博物館編

この目的は本書にも引き継がれている。扱われるトピックは、ウポポイが立地する土地の歴史を概観するもの、国立アイヌ民族博物館の設立経緯を追うもの、ウポポイでの業務と自らのルーツへの向き合い方や思いを語るもの、アイヌ語の新語、案内看板、展示解説文の作成過程における議論を紹介するもの、メインとなる基本展示が伝えたいメッセージや展示方針を整理したものの、展示解説や教育普及の実践から見えてきた課題を紹介するものなど多岐にわたる。

本書の最大の特徴は、13名の執筆者全員が、ウポポイ内の現場に携わるスタッフである点である。現場の最前線にいるスタッフが何を考え、議論し、課題に立ち向かってきたのかを具体的に知ることができる。本書はウポポイについての絶好のガイドブックであると同時に、その黎明期を内側から記録した歴史史料でもある。将来にわたって何度も読み返されることで本書の意義はさらに深まっていくだろう。

